

在日中国人留学生の友人関係とその関連要因：九州大学在学学生を事例に

呉， 暁良
九州大学大学院地球社会統合科学府地球社会統合科学専攻

<https://doi.org/10.15017/1854971>

出版情報：地球社会統合科学研究. 7, pp.35-44, 2017-09-25. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：



在日中国人留学生の友人関係とその関連要因

—九州大学在学生在を事例に—

呉 暁 良

1. 研究背景

本研究の目的は、在日中国人留学生が中国人留学生同士、または日本人学生や他国からの留学生との間でそれぞれどのような友人関係を構築しているかを明らかにするものである。その背景としては、日本における外国人留学生の増加、留学生の出身国の多様化及び大学のグローバル化などがあげられる。

日本学生支援機構によると、2016年5月時点で日本における留学生数は24万人近くに上り、前年度より3万人以上増加している。また、ベトナム、ネパールなど東南アジアや南アジアからの留学生が大幅に増えたことや、欧米の留学生数が増加したことによって、従来の留学生構成には変化が生じており、多様化傾向が強まっている。それに加えて、文部科学省スーパーグローバル大学創成事業などの実施により、今後もさらなる留学生の増加が予想される。

留学生は留学先で異文化適応、言語、生活、学習など様々な課題を抱えているが、その中でも友人関係の構築が最も大きな課題として取り上げられている。これまでに友人関係の構築については留学生の異文化適応、留学満足度、学習成績などと深くかかわることが先行研究で言及されてきた(松下 1999、Blake et al. 2011、Bart and Eimear-Marie 2004、呉 2017a)。また、留学生と日本人学生とのコミュニケーションを活発にするためには、留学生と日本人学生の合同授業や、大学内での混住寮の設置、国際交流を促進するための研修旅行など様々な施策が出されたが、留学生がスムーズに友人関係の構築ができていないのが現状のようである(『平成26年度福岡都市圏における留学生実態調査報告書』、日本学生支援機構『平成25年度私費外国人留学生生活実態調査概要』など)。

この課題を解決するためには、留学生は「同国人」、「ホスト国の者」、「自国以外の国からの留学生」とそれぞれどのような友人関係を構築しているか、様々な関連要因による友人関係への影響は何かを明らかにする必要がある。これを明らかにすることは、大学のグローバル化を

進めている日本において、留学生同士、留学生と日本人学生とのコミュニケーションや異文化理解を促進するためにも不可欠である。

2. 先行研究の考察及び研究目的

留学生の友人関係に関する研究は1970年代から欧米において行われてきた(Bochner et al. 1977、Furnham and Bochner 1982、Furnham and Alibhai 1985)。ハワイ大学のアジア系寮生を対象に調査を行ったBochner et al. (1977) は留学生が友人に求める機能は友人の国籍によって分化されていることを明らかにし、留学生の友人機能モデルを提出した。すなわち、同国人の友人との間に形成され、自文化の価値観を共有したり文化的アイデンティティを維持したりする機能、ホスト側との間に形成され、学習や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能、他国からの留学生との間に形成され、レクリエーションを提供する機能である。また、英国内の留学生400人を対象に調査を行ったFurnham and Bochner (1982) やロンドン大学及びその他の高等教育機関で学ぶ留学生165名に対して調査を行ったFurnham and Alibhai (1985) もBochner et al. (1977) の機能モデルを支持している。

日本においても留学生の友人の構成について、要素別に友人関係の検討など様々な視点から研究が行われてきた(田中他1990a、田中他1990b、田中他1991、横田1991など)。呉(2017a)ではこれらの先行研究をまとめて友人関係の構成、出身国・居住形態・来日期間など要素別に検討し、研究対象、研究方法、要素別に検討する必要性などの問題点を指摘した。具体的には、研究対象が留学生と日本人学生の友人関係に限られていることや、先行研究の友人選出法による「同国人」、「ホスト国の者」、「他の外国人」3グループの比較ができないといった欠点、留学生の専攻・経済状況・外国語能力などの要素による検討がされていないこと、留学生の出身国別による検討が少ないことなどである。

前述したように、日本においては留学生の出身国が多

様化しており、また国際コースの設置などによって英語圏の留学生がさらに増加すると考えられ、留学生と日本人学生の友人関係だけではなく、留学生同士の友人関係に注目する必要があると考えられる。また、多くの先行研究では対象となる留学生にとって「同国人」、「ホスト国の者」、「自国以外の国からの留学生」といったグループに分けることなく、単に最も仲の良い友達を何名かを想定させ、質問項目によって想定した友人の中から最も該当すると思われる1名を記入させる手法をとっている。そのため、「同国人」、「ホスト国の者」、「自国以外の国からの留学生」といった区別もなく記入させる手法では、上記のグループ間の友人関係を比較するための情報が不足しており、グループ間の比較ができないと考えられる。さらに、留学生の専攻、経済状況、外国語能力などの要素が留学生の友人関係に影響を及ぼす可能性があり、これらの要素が留学生の友人関係の構築とどのように関わっているかを明らかにする必要がある。

留学生の出身国別に留学生の友人関係構築を検討する必要性について、田中(2000)は「留学生のネットワークの特徴が、当該国の状況次第で異なってくる」と指摘している。また、湯(2004)は「留学生の文化背景、生育環境、受けてきた教育などによって、彼らの要求や日本の生活で遭遇する問題が異なることが十分予想できる。研究対象をある特定の文化圏あるいは出身国地域の留学生集団に限定することが必要とされている」とその必要性を強調している。Bart and Eimear-Marie(2014)でも「留学生と同文化圏や異文化圏の学生との友人関係は、留学生の持つ文化背景ごとに、時間の経過とともに変化に違いがある」と留学生の持つ文化背景について言及している。日本における留学生の中で中国人留学生が占める割合が最も高いにもかかわらず、中国人留学生のソーシャル・ネットワークに関する先行研究は木村・中込(2003)、湯(2004)、戦(2007)、石原(2011)、佐々木他(2012)、小松(2013)しかあげられない。

そこで、本研究では中国人留学生を対象に、中国人留学生が中国人留学生同士(「中・中」)、日本人学生(「中・日」)、中国以外の国からの留学生(「中・他」とそれぞれどのような友人関係を構築しているのか、専攻、経済状況、居住形態、外国語能力、在学期間などの関連要因が友人関係にどう影響しているかを明らかにする。なお本研究で言及する留学生の友人関係とは留学生の同国人、ホスト国の学生、他国の留学生との「勉強」、「レクリエーション」、「自文化共有や異文化理解」などの面における友人付き合い全般を指す。

3. 研究方法

3.1 質問紙調査

九州大学に在籍する中国人留学生を対象として、2016年1月から2月にかけて九州大学伊都キャンパス、箱崎キャンパス、病院キャンパス、大橋キャンパスという4つのキャンパスにおいて中国語版の質問紙を用いて調査を行った。調査者本人または知り合いを通じて質問紙を配布・回収し、回答総数は96部であった。そのうち、有効回答は95部であった。

3.2 調査内容

3.2.1 調査対象者の基本属性

この項目では調査対象者の性別、年齢、専攻、在学期間、在学身分、経済状況、居住形態及び外国語能力といった調査対象者の属性を確認した。

調査対象者95名のうち、男性は40名(42.1%)、女性は55名(57.9%)である。専攻は、理科系39名(41.1%)、文科系56名(58.9%)であり、性別や専攻において、調査対象者のバランスがとれていることがわかる。調査対象者の年齢は20歳から30歳までである。在学期間については、95人のうち、半年以内が17人(18%)、半年～1年が15人(16%)、1年以上～1年間半が15人(16%)、1年間半以上～2年間が16人(17%)、2年以上が32人(33%)となっており、異なる在学期間帯の人数が確保できている。

在学身分については、博士課程が28人(30%)、修士課程が35人(37%)、研究生が21人(22%)、学部生と交換留学生がそれぞれ7人(8%)、3人(3%)であり、調査対象者の身分は大学院生にやや集中していることがわかる。経済状況について、自費で奨学金がない学生が62人(65%)であるのに対して、国費または自費で奨学金がある学生が33人(35%)である。居住形態については、アパートに住んでいる学生が62人(65%)であるのに対して、留学生会館や学生寮、公営住宅に住んでいる学生は33人(35%)である。

また、外国語能力については、留学生の友人付き合いでは会話を中心に行うという状況から、本調査では米国外国語教育協会(ACTFL)によって開発された汎言語的に使える会話能力テスト(OPI外国語の口頭運用能力を測定するためのインタビューテスト)の評価尺度を参考にして、超級、上級、中級、初級、ゼロという5段階を設定した。具体的には、各段階に関する具体的な説明文を提示し、調査対象者に実際の会話能力と最も相応しい選択肢を選んでもらった。表1にその結果を示した。以下の結果から、調査対象者の日本語能力は上級と中級に

集中しているのに対して、英語能力は中級と初級に集中していることがわかった。全体を通して見ると、英語より日本語のほうがレベルが高かった。

表1 被調査者の外国語能力

レベル	日本語能力		英語能力	
	人数	比率%	人数	比率%
超級	17	17.9	4	4.2
上級	32	33.7	19	20.0
中級	34	35.8	46	48.4
初級	8	8.4	26	27.4
ゼロ	4	4.2	0	0.0
計	95	100.0	95	100.0

3. 2. 2 友人関係を測定する質問項目

友人関係を測定する質問項目は、Bochner et al.(1977)、Furnham and Bochner (1982) と Furnham and Alibhai (1985) を参考にした。しかし、本研究では、「一緒に水泳に行く」、「一緒にコンサートに行く」、「一緒に図書館に行く」、「一緒に病院に行く」などの先行研究で結果に影響を与えなかった項目を取り除き、「言葉の添削」、「勉学面の相談」、「イベントへの参加」、「料理をする」など勉学、レクリエーション、自文化共有と異文化理解についての12の場面を作成した。そのうち、項目⑩は逆転項目である。この12の場面はBochner et al. (1977) で明らかにした留学生の友人機能モデルのすべての機能が含まれており、留学生の友人付き合い全般を反映していると言える。

- | | |
|------------|-------------|
| ①母国や故郷の話 | ⑦勉学情報の提供 |
| ②言葉の添削 | ⑧料理 |
| ③買い物 | ⑨イベントへの参加 |
| ④勉学面の相談 | ⑩浅い関係で立ち話程度 |
| ⑤落込み時の頼り | ⑪観光や見学旅行 |
| ⑥パーティーへの参加 | ⑫スポーツ |

12の場面について、調査対象者に中国人留学生同士、日本人学生、中国以外の国からの留学生からもっとも仲の良い友人を1名ずつ想定させ、質問項目で設定された場面についてどの程度想定した友人と自身の現状とが一致するかを、「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」という4つの選択肢から選択させた。

また、12の場面を選択させる前に、調査対象者に自分の友人関係について自己評価させた。「私は大学/大学院で(中国人留学生同士・日本人学生・他国の留学生)の友人を作ることができた」という質問を設定し、中国

人留学生同士、日本人学生、他国の留学生との友人関係の構築状況をそれぞれ「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」4つの選択肢から選択させた。

3. 2. 3 友人関係構築の阻害要因を測定する項目

予備調査の結果(呉 2017b) 及び先行研究の項目に基づいて、本研究で用いる阻害要因項目を設定した。中国人留学生同士、中国人留学生と日本人学生、中国人留学生と中国以外の国からの留学生3グループの共通の阻害要因が11項目あり、「中・中」、「中・日」、「中・他」独自の阻害要因項目はそれぞれ4項目、10項目、10項目である。共通の阻害要因項目と各グループの独自の阻害要因を合わせて、「中・中」15項目、「中・日」21項目、「中・他」21項目となる。

各項目で設定した阻害要因に対して、「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「まったく当てはまらない」という4つの選択肢を設定し、その阻害要因がどの程度自分の現状に相応しいかを調査対象者に選択させた。

3. 3 分析方法

本稿では3.2.2で示している友人関係を測定する質問項目を中心に分析を行う。12の場面に答える前提として、中国人留学生同士、日本人学生、他国の留学生の友人ができてきていることである。そのため、「中・中」、「中・日」、「中・他」のいずれのグループにおいても、自己評価の質問項目で「全く当てはまらない」と選択し、また12の項目で逆転項目⑩を除きすべて「全く当てはまらない」と選択した調査対象者については、該当のグループの友人がいないと判断し、分析対象から除外した。この基準で判断した結果、「中・中」、「中・日」グループは95人全員、「中・他」グループは77人を分析対象とした。

「中・中」、「中・日」、「中・他」はどのような友人関係を構築しているかを明らかにするために、各項目において、「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した調査対象者の比率を算出し、50%を超える場合、該当の項目において友人付き合いのつながりが強いと認める。また、友人関係の関連要因を検討するには、まず、逆転項目⑩を処理した上で、各項目に対して点数を付け(「非常に当てはまる」4~「まったく当てはまらない」1)、「中・中」、「中・日」、「中・他」グループの平均値を算出した。続いて、性別、専攻、経済状況、居住形態により、それぞれのグループの平均得点に差が見られるかを検討するため、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・学生寮など」を独立変数、

それぞれのグループの平均得点を従属変数としたt検定を行った。また、在学期間、外国語能力が友人関係にどのような影響を及ぼすかを検討するため、在学期間、外国語能力を独立変数、それぞれのグループの平均得点を従属変数とした相関分析を行った。さらに、各要素から様々な面の友人付き合いへの影響を見るため、「中・中」、「中・日」、「中・他」3グループに対して因子分析を行い、因子別に各要素による影響を検討することにした。具体的には、「男・女」、「理系・文系」、「奨学金あり・奨学金なし」、「アパート・学生寮など」を独立変数、因子の平均値を従属変数としたt検定を行った。また、在学期間、日本語能力を独立変数、因子の平均値を従属変数とした相関分析を行った。

4. 研究結果

4. 1 中国人留学生の友人関係について

「中・中」、「中・日」、「中・他」の3つのグループにおける中国人留学生の友人関係の結果は図1で示している。図1から、同項目において、中国人留学生は同国人留学生、日本人学生、他国の留学生とそれぞれどのような友人関係を構築しているかが見えてくる。

図1によると、中国人同士での友人付き合いは項目②「言葉の添削」と逆転項目⑩を除き、すべての項目において「非常に当てはまる」と「やや当てはまる」を選択した人が全体の50%を超えている。①「故郷の話」は自文化の共有に関するものであり、③「買い物」と⑧「料理をする」は自文化の共有機能があるとともに、レクリエーション機能も有する。⑥「パーティー」、⑨「イベントへ

の参加」、⑪「旅行」、⑫「スポーツ」は同国人の間ではレクリエーションの機能を果たしている。④「勉強面の相談」、⑦「勉強情報の提供」は勉強に関する項目であり、⑤「落込み時の頼り」は情緒的助けに関する項目である。このように、中国人留学生同士の間では、自文化の共有、勉強、レクリエーション、情緒的助けなどすべての面において強いつながりがあることがわかった。

日本人学生との場合、項目①、②、④、⑦、⑨、⑩は50%を超えている。項目②、④、⑦は勉強に関するもので、項目①、⑨は普段の話やイベントへの参加を通して相互理解を深めるといふ異文化理解に関する項目である。項目⑩は友人付き合いの深さを示している。上記の分析から、中国人留学生と日本人学生の友人付き合いは勉強サポートと異文化理解に集中しており、また、その関係は浅く、日常の立ち話程度にとどまっていることがわかった。

他国からの留学生との場合は50%を超える項目は⑩のみであり、項目①と⑨は45%を超えている。項目①、⑨は「中・日」と同じく異文化理解に関するものであるため、中国人留学生と他国からの留学生との友人付き合いはある程度異文化理解においてのつながりがあるが、その関係は浅く、日常の立ち話程度にとどまっていることがわかった。ここから、友人の国籍によって中国人留学生の友人関係には違いが見られることがわかった。このように3グループ間の比較考察が見逃された先行研究の不足点に対して、本研究は検討を行い、それぞれのグループの友人関係を明らかにしたと同時に、グループ間の比較を行うことができた。

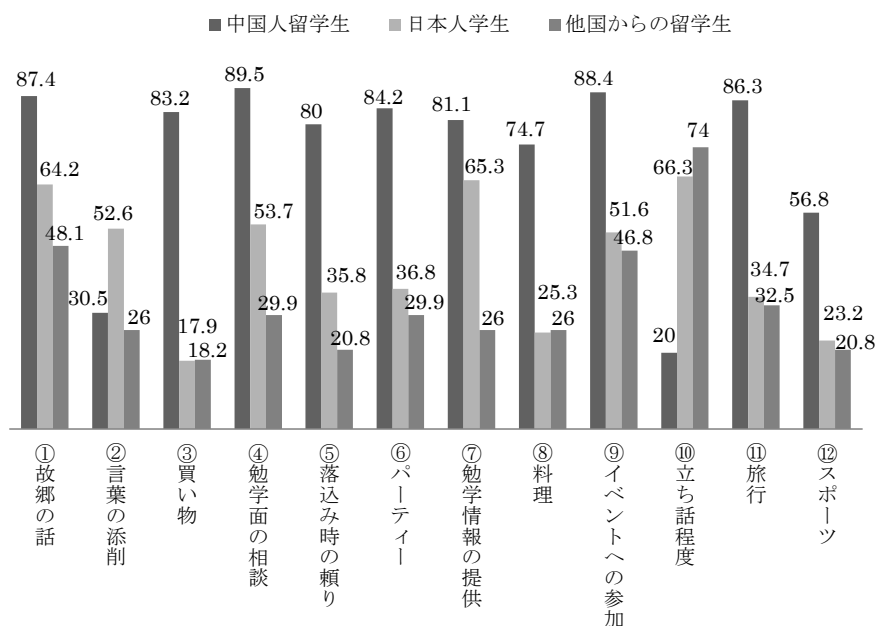


図1 中国人留学生の友人関係について

4. 2 要素別による検討

要素別に検討した結果、「男・女」において、中国人留学生同士の間だけで有意な差が示された(表2)。この結果から男性より、女性のほうが全体的に同国人とよりよい友人関係を構築していることが視える。一方、専攻、経済状況及び居住形態による留学生の友人付き合い方には違いが見られなかった。

表2 男女別 t 検定の結果

	男性			女性			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
中・中	3.15	.82	40	3.28	.47	55	-1.046*
中・日	2.27	.61	40	2.30	.61	55	-.273
中・他	1.91	.71	30	1.94	.78	47	-.183

* $p < .01$

また、外国語能力と中国人留学生の友人関係について、日本語能力は日本人学生との友人関係の間に低い正の相関関係が認められ($r = .371, p < .01$)、英語能力は他国からの留学生との友人関係の間に低い正の相関関係が認められ($r = .302, p < .01$)、外国語能力が中国人留学生と日本人学生、他国からの留学生との友人関係に影響を与える可能性があることがわかった(表3、4)。すなわち、中国人留学生の日本語能力が高ければ高いほど、日本人学生との友人付き合いが深く、英語能力が高ければ高いほど、中国以外の国からの留学生との友人付き合いが深いことが予想される。その他、英語能力と中国人留学生同士の友人関係の間には低い正の相関関係が認められたが($r = .224, p < .05$)、中国人留学生同士の友人付き合いは言語による影響がほとんどないため、この結果は単なる偶然によるものであると考えられる。その他、在学期間と友人関係の間には相関関係が見られなかった。

表3 日本語能力と友人関係との関係

	M	SD	N	t 値
中・中	3.23	.64	95	-.130
中・日	2.29	.60	95	.371*
中・他	1.93	.75	77	.025

* $p < .01$

表4 英語能力と友人関係との関係

	M	SD	N	t 値
中・中	3.23	.64	95	.224*
中・日	2.29	.60	95	.143
中・他	1.93	.75	77	.243*

* $p < .05$

4. 3 因子別の検討

4. 3. 1 「中・中」グループ

友人関係を測定する12項目のうち、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」は友人関係の深さに関する項目であるため、因子分析の対象から除外した。「中・中」グループの11項目に対して因子分析を行った結果、二つの因子が抽出された(表5)。第一因子は中国人留学生と一緒に食事、旅行、料理などのことを通して楽しむことや、母国、故郷のことを話し合うといった自文化共有などのことであり、「勉学外の友人付き合い」とした。第二の因子は学業の相談、勉学情報の提供や言葉の添削など勉学に関するもので、「勉学面の友人付き合い」と名付けた。

表5 「中・中」友人関係因子分析結果

	因子 I	因子 II
因子 I 「勉学外の友人付き合い」		
⑥ 中国人留学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	.776	.354
⑨ イベントがあるとき、中国人留学生の友人を誘って一緒に参加している。	.761	.211
⑪ 観光や見学旅行に行くとき、中国人留学生の友人と一緒にいる。	.719	.373
① 自分の母国や故郷のことを中国人留学生の友人とよく話している。	.629	.252
⑤ 落ち込んだ際、中国人留学生の友人に頼る。	.627	.379
⑧ 中国人留学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	.603	.295
③ よく中国人留学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	.495	.334
⑫ よく中国人留学生の友人と一緒にスポーツをしている。	.467	.160
因子 II 「勉学面の友人付き合い」		
④ 学業に困ったことがあるとき、中国人留学生の友人に相談している。	.348	.825
⑦ 中国人留学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	.249	.774
② レポート提出や発表に際して、中国人留学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	.207	.399

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

因子別に分析した結果、男女による2因子とも有意な差が見られた(表6)。いずれの因子においても、男性より、女性のほうが平均値が高いという結果が示され、中国人留学生同士の友人付き合いにおいて、男性より女性の方が中国人留学生同士と親密な関係を持つ傾向があることがわかる。

表6 男女別 t 検定結果(「中・中」)

	男性			女性			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	2.87	.94	40	2.95	.64	55	-.488*
因子 II	3.24	.87	40	3.43	.54	55	-1.346*

* $p < .01$

4. 3. 2 「中・日」グループ

「中・日」グループにおいても、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」を除外した。また、複数の因子に高い寄与を示している項目⑤「落ち込んだ際、日本人学生の友人に頼る」を外し、10項目を対象として因子分析を行った結果、三つの因子が抽出された(表7)。第一因子は、一緒にパーティーや食事会に参加することや、一緒に観光に行くこと、料理をすることなどであるため、「共同リラックス行動」と命名した。第二因子は日本人学生から勉強情報の提供、学業に関する相談や言葉の添削などに関するもので、「勉強サポート」と名付けた。第三因子は、一緒にイベントに参加し相互理解を促進することや、互いの国・故郷のことを話し合うことであるため、「異文化理解」因子とした。

表7 「中・日」友人関係の因子分析結果

	因子 I	因子 II	因子 III
因子 I 「共同リラックス行動」			
⑪ 観光や見学旅行に行くとき、日本人学生の友人と一緒にいる。	.719	.301	.046
⑥ 日本人学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	.712	.300	.330
⑧ 日本人学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	.599	.114	.203
⑫ よく日本人学生の友人と一緒にスポーツをしている。	.484	.019	.258
③ よく日本人学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	.461	.367	.054
因子 II 「勉強サポート」			
⑦ 日本人学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	.105	.878	.254
④ 学業に困ったことがあるとき、日本人学生の友人に相談している。	.199	.634	.304
② レポート提出や発表に際して、日本人学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	.257	.567	.071
因子 III 「異文化理解」			
⑨ イベントがあるとき、日本人学生の友人を誘って一緒に参加している。	.382	.174	.687
① 自分の母国や故郷のことを日本人学生の友人とよく話している。	.131	.347	.557

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表8は因子別に分析を行った結果である。日本語能力は3因子とも弱い正の相関関係が認められた。この結果から、日本人学生との「共同リラックス行動」、「勉強サポート」、「異文化理解」のいずれの面の友人付き合いにおいても中国人留学生の日本語能力が関係していることが視える。

表8 日本語能力と因子別の相関関係(「中・日」)

	M	SD	N	相関係数
共同リラックス行動	1.97	.63	95	.259*
勉強サポート	2.72	.88	95	.345**
異文化理解	2.58	.78	95	.335**

* $p < .01$ ** $p < .01$

4. 3. 3 「中・他」グループ

「中・他」グループにおいても、逆転項目⑩「日本人学生との友人付き合いでは、単に立ち話をする程度に留まっている」を除外した。「中・他」グループの11項目に対して因子分析を行った結果、二つの因子が抽出された(表9)。第一因子は一緒に食事、旅行、料理などのことを通して楽しむことや、イベントや互いの国・故郷の話を通して相互理解を深めることであるため、「レクリエーション・異文化理解」因子とした。第二因子は学業の相談、勉強情報の提供や言葉の添削など勉強に関することと悩みの相談といった情緒的な助けであるため、「勉強・情緒的サポート」と名付けた。

因子別に分析した結果、因子 I 「レクリエーション・異文化理解」において居住形態の差が見られた(表10)。このことから、アパートに住んでいる中国人留学生より、留学生会館、学生寮などの場所に住んでいる中国人留学生のほうが、他国の留学生とのレクリエーション・異文化理解面の友人付き合いが深いと言える。その原因は、留学生会館や学生寮においては、様々な交流会があり、アパートに住んでいる人より他国の留学生と接するチャンスが多いためと考えられる。

また、英語能力は「レクリエーション・異文化理解」因子との間で弱い正の相関関係が認められ、また「勉強・情緒的サポート」との間で相関係数は10%水準で弱い正の相関関係の傾向が見られた(表11)。この結果から、他国の学生との「レクリエーション・異文化理解」、「勉学的・情緒的サポート」面の友人付き合いにおいて、中国人留学生の英語能力が高いほど、その友人付き合いが深い傾向があることがわかる。

表9 「中・他」友人関係の因子分析結果

	因子 I	因子 II
因子 I 「レクリエーション・異文化理解」		
⑥他国の留学生の友人と一緒にパーティーや食事会に行っている。	.872	.348
⑨イベントがあるとき、他国の留学生の友人を誘って一緒に参加している。	.829	.322
⑪観光や見学旅行に行くとき、他国の留学生の友人と一緒にいる。	.713	.414
⑫よく他国の留学生の友人と一緒にスポーツをしている。	.654	.210
⑧他国の留学生の友人と一緒に料理をして楽しんでいる。	.643	.392
①自分の母国や故郷のことを他国の留学生の友人とよく話している。	.576	.391
③よく他国の留学生の友人と一緒に買い物に出かけている。	.508	.379
因子 II 「勉学・情緒的サポート」		
④学業に困ったことがあるとき、他国の留学生の友人に相談している。	.319	.833
⑦他国の留学生の友人から勉強や研究に必要な情報の提供がある。	.259	.780
⑤落ち込んだ際、他国の留学生の友人に頼る。	.526	.654
②レポート提出や発表に際して、中国人留学生の友人は言葉遣いを添削してくれる。	.331	.501

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

表10 居住形態別 t 検定結果(「中・他」)

	アパート			学生寮など			t 値
	M	SD	N	M	SD	N	
因子 I	1.97	.86	47	2.00	.73	30	-.202*
因子 II	1.83	.83	47	1.89	.85	30	-.317

* $p < .05$

表11 英語能力と因子別の相関関係(「中・他」)

	M	SD	N	相関係数
因子 I	1.98	.80	77	.234**
因子 II	1.85	.83	77	.209*

* $p < .1$ ** $p < .05$

5. 考察

在日中国人留学生の友人関係とその関連要因について分析した結果、友人の国籍によって在日中国人留学生の友人付き合いが異なることが分かった。また、外国語能力、性別、居住形態が中国人留学生の友人関係に影響を与えていることが明らかになった。

具体的には、中国人留学生同士の友人付き合いは自文化共有、勉学、レクリエーション、情緒的助けなどすべての面において強いつながりがあり、日本人学生との場合、勉学と異文化理解の面のみ強いつながりがあり、他

国の留学生との場合は友人付き合いが浅く、ある程度異文化理解においてのつながりがあるが、日常の立ち話程度にとどまっていることがわかった。本研究で明らかにした中国人留学生の友人関係は、先行研究の一部を支持していたが、異なる部分もあった。

まず、同国人との友人付き合いについて、Bochner et al. (1977) では同国人の友人との自文化共有機能を主張し、田中(1990b, 1991)では楽しみ、物、お金、相談では同国人との援助が多い傾向があると示されたが、本研究では上記の機能以外に、中国人留学生の同国人との勉学面の機能も明らかにした。勉学機能について、Bochner et al. (1977) ではホスト側が同国人の3倍或いはそれ以上であると指摘され、横田・田中(1992)では同国人とホスト国の者はほぼ同数であることと述べている。一方、本研究では、目標言語の添削機能は同国人より日本人学生のほうが多いが、勉学面の相談や勉学情報の提供においては同国人のほうが多いことが明らかになった。この結果から、他国の留学生の同国人との友人つながりより、中国人留学生同士の友人付き合いは広く、つながりが強いと言える。その理由は、他国の留学生と比べ、在日中国人留学生の数は圧倒的に多く、小さなコミュニティがより形成しやすいためではないかと考えられる。

また、ホスト国の者との友人関係について、Bochner et al. (1977) ではホスト国の者との言語及び勉学の助けの機能が明らかにされ、田中他(1990b, 1991)では日本語、日本文化、情報、勉強では日本人の援助が期待できると示されている。本研究では中国人留学生は勉学、異文化理解の面において日本人学生との友人付き合いが強いとの結果が得られ、先行研究の結果を支持している。この結果から、留学生がホスト国の者に求めている援助は留学生の出身国または留学先と関係なく、言語、勉学及び異文化理解に集中していることがわかる。

他国の留学生との友人関係については、Bochner et al. (1977) では他国からの留学生との間にレクリエーションの場を提供する機能が明らかになったが、田中他(1990b, 1991)では他国の留学生とレクリエーションの場を提供する機能が見られなかった。本研究の結果は同じく日本で行われた研究である田中他(1990b, 1991)の結果を支持している。この違いは研究が行われる地域における留学生出身国の構成と関係していると考えられる。Bochner et al. (1977) が調査を行っている地域はハワイであるが、田中他(1990b, 1991)と本研究は日本で行ったものである。留学生の出身国を見ると、日本における留学生出身国の90%以上はアジアである。それに対して、アメリカは1980年代からアジア出身の

留学生が5割程度となり、2015-2016年現在でも66%であるため (Open Doors 2016, Institute of International Education)、留学生の出身国の構成は日本と大きく異なっている。このような留学生出身国構成の違いは、留学生にとっては、他国からの留学生との友人付き合いに与える影響が大きいと考えられる。

上記に考察したように、在日中国人留学生の友人関係の結果は留学生全体を研究対象とする先行研究の結果と完全に一致はしなかった。その原因は調査方法や調査時期と関係していると考えられるが、調査対象者の出身地域からの影響も大きいと考えられる。そのため、大学から何らかの支援策を検討する際は、留学生を一つのグループとしてみなすべきではなく、それぞれ異なる文化背景を持つ留学生の特徴を重視し、その特徴に相応しい施策を出すことが必要である。

さらに、本研究の結果である中国人留学生は同国人との友人関係が一番強いことは、横田 (1991) での「留学生同士と比べて、日本人との友人関係が明らかに少ない」という結果や、戦 (2007) での「日本人学生と中国人留学生両方共に自国の友人の数が多く、交流する頻度が高く、より親しい関係を持っているが、相手国の友人は少なく、浅い関係にとどまっている」という結果と一致している。この結果は中国人留学生の友人付き合いが同国人志向であることを反映している。

しかし、Bart and Eimear-Marie (2014) は同国人との友人付き合いに集中することは、留学初期においては留学生の異文化の適応に役に立つが、時間が経過しても同国人との友人付き合いに集中し過ぎると、留学生の異文化適応を阻害すると述べている。また、研究背景で言及していたようにホスト国の異文化環境にうまく適応すること、またホスト国の学生との間の友人関係を構築することは、留学生の学習成績や留学の満足度の向上、退学者数の減少など肯定的な効果と関連づけられている。Blake et al. (2011) では他国の留学生との友人付き合いは、世界への認知を深めること、ホスト国以外の文化を学ぶチャンスを増やすこと、孤独感をなくすことやプレゼンテーション能力の向上に役に立つと指摘している。本研究の結果から、在日中国人留学生の友人付き合いは同国人に集中し過ぎており、日本人学生や中国以外の国からの留学生との友人付き合いは限られていることがわかる。いかに留学生の同国人との友人付き合いを維持しながら、ホスト国の学生や他国からの留学生との友人付き合いを広げていくかが学生だけではなく、大学関係者にとっても大きな課題と考えられる。これを解決することは、近年日本の高等教育機関が求めているキャンパスのグローバル化の実現にとっても重要である。

友人関係の関連要因について、中国人留学生の日本語能力が高ければ高いほど、日本人学生との友人付き合いが深く、英語能力が高ければ高いほど、中国以外の国からの留学生との友人付き合いが深いことがわかった。また、性別について、中国人留学生同士の友人付き合いにおいて、男性より女性の方が中国人留学生同士と親密な関係を持つ傾向があることがわかった。居住形態について、中国人留学生と他国からの留学生の「レクリエーション・異文化理解」面の友人付き合いにおいて居住形態の差が見られた。

上記のように、日本語能力と英語能力が在日中国人留学生の友人関係に与える影響が明らかになった。日本留学というものの、他国からの留学生との友人付き合いを促進するためには、英語が必要であるといった見逃せない事実がある。これは中国人留学生だけではなく、日本人学生や非英語圏の学生にとっても重要であると考えられる。従来、大学では留学生のみに日本語コースを押し付けるという一方通行的な手法を用いている。しかし、国籍が異なる留学生同士のコミュニケーションや相互理解を促進させるには、この手法よりも、日本人学生や非英語圏の留学生を合わせて実用英語コースを提供するといった双方向的な手法を用いるべきではないだろうか。

言語面以外に、居住形態に対しても注目すべきである。アパートに住んでいる中国人留学生より、留学生会館、学生寮などの場所に住んでいる中国人留学生のほうが、他国の留学生との「レクリエーション・異文化理解」面の友人付き合いが深いという結果から、留学生会館や学生寮に住むことは留学生同士の友人関係構築を促進する効果があると言える。しかし、多くの大学では留学生会館や学生寮の部屋数が不足していることから、居住期間は半年や一年間に限られており、これは留学生の友人関係の構築と維持に悪影響を与える可能性がある。そのため、留学生同士の友人関係を促進させ、またキャンパスのグローバル化を実現させるためには、学生寮の課題を無視することはできないだろう。

6. 今後の課題

本研究はケーススタディとして2,000人以上の留学生が在籍している九州大学において実施した調査である。この結果は留学生受入れ数で中小規模の大学にも当てはまるか、日本人学生または他国からの留学生からみた中国人留学生との友人関係はどのようなものであるか、日本人学生と他国からの留学生との友人関係の構築に阻害する要因は何かという点について、さらなる調査を行う必要があると考えられる。

また、本研究において調査対象者のほとんどは大学院生であるため、学部留学生の友人関係構築の現状はどうであるかという点についてさらに検討する必要がある。さらに、専攻、経済状況、居住形態、在学期間などは留学生の友人関係に影響を与える要因と考えられるが、調査対象者の総数は95名と少なかったため、分析を行ったものの、その関係が見られなかった。今後、さらに調査対象者の人数を増やし、諸関連要因による影響を再分析する必要があると考えられる。以上を今後の課題としたい。

参考文献

- Bart.R. & Eimear-Marie.N. (2014) Understanding friendship and learning networks of international and host students using Longitudinal Social Network Analysis. *International Journal of Intercultural Relations*, 4, pp.165-180.
- Blake,H., Devan,R., & R. Kelly Aune. (2011) An analysis of friendship networks, social connectedness, homesickness, and satisfaction levels of international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35 (3) , pp.281-295.
- Bochner,S., Mcleod,B., & Lin, A. (1977) Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12(4), pp.277-294.
- Furnham,A. & Bochner,S. (1982) Social difficulty in a foreign culture: An empirical analysis of culture shock. In Bochner, S, (eds.) *Culture in Contact: Studies in Cross cultural Interaction*. pp.161-198.
- Furnham,A. & Alibhai,N. (1985) The friendship networks of foreign students: A replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20 (3-4) , pp.709-722.
- 石原翠 (2011)「留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連—中国人留学生の場合」『異文化間教育』34号 異文化間教育学会 pp.136-150.
- 木村玉己・中込美賀子 (2003)「中国人留学生と日本人留学生にみる行動認知差分析」『千葉大学教育学部研究紀要』第51巻 pp.285 -288.
- 呉曉良 (2017a)「在日留学生のソーシャル・ネットワークに関する研究の総括」『地球社会統合科学研究』6号 pp.29-39.
- 呉曉良 (2017b)「在日中国人留学生の友人関係構築における影響要因—自由記述の分析結果により—」『日語教育与日本学研究』華東理工大学出版社 pp.304-308
- 小松翠 (2013)「中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第12号 pp.71-86.
- 佐々木泰子・張瑜珊・鄭士玲 (2012)「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究」『異文化間教育』35 異文化間教育学会 pp.104-117.
- 戦旭風 (2007)「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』12号 留学生教育学会 pp.95-105.
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・村中千穂・藤原武弘 (1990a)「在日外国人留学生の適応に関する研究(1)—異文化適応尺度の因子構造の検討—」『広島大学総合科学部紀要』Ⅲ 第14巻 pp.77-94.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1990b)「在日外国人留学生の適応に関する研究(2)—新渡日留学生の一学期間におけるソーシャル・ネットワークの形成と適応—」『広島大学総合科学部紀要』Ⅲ 第14巻 pp.95-113.
- 田中共子・高井次郎・南博文・藤原武弘 (1991)「在日外国人留学生の適応に関する研究(3)—新渡日留学生の半年間におけるソーシャル・ネットワーク形成と適応—」『広島大学留学生センター紀要』(1) pp.77-95.
- 田中共子 (2000)『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 湯玉梅 (2004)「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の観点から—」『国際文化研究紀要』10 横浜市立大学 pp.293-328.
- 松下達彦 (1999)「留学生のためのソーシャル・サポートと日本語教育—教室外環境と教室内環境の融合を目指して—」『留学交流』12月号 pp.16-19.
- 横田雅弘 (1991)「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』105 (5) pp.629-647.
- 横田雅弘・田中共子 (1992)「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク:居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較」『学生相談研究』13 (1) pp.1-8.

Friendships Developed by Chinese International Students in Japan and Related Factors: Case Study of Kyushu University Students

Xiaoliang Wu

International students face various challenges, such as the language barrier and culture shock when faced with a new intercultural society. The construction of friendships is closely related to intercultural adaptation for international students.

Prior studies, especially those conducted in Japan, have seen researchers only focus on social networks between international students and local people. This approach tends to treat all international students as one group, irrespective of their home country. Given this trend, it is important to reveal the friendship structures that exist not just between students from abroad and their Japanese counterparts, but also those that have been formed within the community of international students.

The purpose of this study is to investigate what kinds of friendships have been forged by Chinese students, who account for more than 40% of all international students in Japan. There was a specific focus on friendships in and across three groups: 1) amongst Chinese international students, 2) between Chinese international students and Japanese students, 3) between Chinese international students and international students from other countries. The results suggest that the kind of friendships developed by Chinese international students differ depending on the nationality of their companions. Most Chinese international students affirm and express their cultural origins, spend leisure time, and seek emotional support from other Chinese international students, but not Japanese students or international students from other countries.